

講演会開催報告

「柳田國男と布佐・布川」

講師 小島 ^{よしゆき} 櫻禮 氏（琉球大学名誉教授）

平成 27 年 11 月 21 日（土曜日） 生涯学習センター アビスタ ホール

以下は企画展「杉村楚人冠と柳田國男」にあわせて開催した講演会の要旨である。要旨の作成は杉村楚人冠記念館で行った。

^{やなぎたくにお} 柳田國男の『故郷七十年』を読んで思うのは、一人の偉大な学者といえども、育ったところの環境、そこで体験したことが大事な栄養になっているということである。そこには、布川^{かわ}、布佐^{ふさ}でいろいろな体験をしたこと、岡田武松（布佐出身の気象学者）と巡り合ったことが事細かに書いてある。柳田は布川の地蔵堂で間引き絵馬を見て、いかに飢饉が恐ろしいか、食っていくことがいかに大変かという庶民の苦勞を感じた。それが農政学の道へ進むきっかけになっている。少年期の体験をいかに自分の人生の糧にしたかという問題が、その背後にあるように思う。

ところで、その土地に縁のある社会的に大きな活躍した人物を懐かしむのはなぜだろうか。理由の一つは、その人物がその土地を理解するのに大切な問題を残してくれているからではないか。その土地で青年期、少年期を過ごした人物は、その土地の持つ文化の歴史を持って体験的に生かしてきたはずである。柳田が少年期に兵庫から布川そして布佐へと移り、ここで過ごしたことに大きな意味があるとすれば、それは生活体験として日本の東西の文化の大事なところを吸収することができたところにあるのだと考えられる。

柳田に「海女部史のエチュウド」という作品がある。偶然にもこれは、楚人冠の随想も収められた『現代随筆大観』（昭和 2 年）に載っている。その書き出しは、東京に出るまで海を見たことがなかったという柳田の海への憧れの回想である。ここから書き始めるのは、幼少期の体験を重く考えていた証拠だろう。だから、布川・布佐での体験も、大変重い体験であったことは間違いない。岩波版『利根川図志』の解説にも、自分の育った土地で吸収したことを土台に次の学問を組み立てていく態度が見える。『利根川図志』という、昔の町医者が書いた本も同じように、その土地の持っている情報を有効に生かして書いているのである。

『利根川図志』のなかで、布佐にとって大事なのが鮭が名産だったということだろう。鮭の問題を考えると、布佐・布川の辺りは古代には入り海であったことに思い当たる。布佐・布川と海がどうかかわっているかを考えてみたい。『利根川図志』は『北越雪譜』に影響を受けて書かれている。赤松宗旦が『北越雪譜』に影響を受けたと思われる話の一つが、鮭が上る季節に発生する蛾がいる、という話で、柳田が興味を持ちそうに思うのだが、『利根川図志』の解説では直接は鮭のことを書いていない。しかし、『郷土研究』では鮭の伝承を書

いたことがある。

考古学では鮭の食料としての重要性が指摘されてきた。カムチャッカ半島の原住民カムチャダールは上ってきた鮭を手づかみで獲り、穴の中に入れて発酵させ一年中食べていたという。これが北太平洋地域の鮭の文化の特質ではなかっただろうか。すると、鬼怒川河口だった時代の布川・布佐は、上ってくる鮭を食べて豊かな生活をする事ができる場所だった可能性がある。ここは、かつての鮭が獲れる町として古い歴史があったのではないかと想像できる。今は地元で鮭を獲って食べることはなくても、こういう風土の重みを持って暮らしているのではないだろうか。

神奈川県愛甲郡では、宮ヶ瀬村がダムに水没する前に発掘が行われ、旧石器時代の炉の跡が出土している。江戸幕府の作った『新編相模国風土記稿』の鮎の項にもここが出てくる。関東大震災のとき土砂流出で大きな被害が出て、ダムができるまでは、川のまん中に座り、手づかみで鮎をとることができたという。旧石器時代にも、いくらでも向こうから食べ物が来てくれるようなところだったのではないか。我孫子の場合も、川の鮭の恵みと、山のケモノの恵みで、食べ物に困ることのない、旧石器時代の人間のセンターだったところなのではないか。そのおかげで柳田國男や岡田武松が偉くなったということではないが、歴史の持っている重みがあちこちに生きているように思う。そういう風土の持っている力を見直してみるといいのではないか。

『常陸国風土記』では霞ヶ浦、北浦は「なさかの海」と書かれている。「なさか」とは波が逆流することである。今は利根川に閘門がある。塩害に備えて海水の流入を防いでいるのである。逆に沿岸から製塩の遺跡が出土している。この時代の布佐・布川は大量の鮭が上ってくる場所だった可能性が高い。『利根川図志』には、布川まで来ないと、鮭が海臭くておいしくないと書かれている。現在でも潮の干満の影響が及ぶのは布川・布佐までである。これらのことを考えると、ここは河口だから渡し場ができ、両岸が発展したのではないか。

「布川」・「布佐」と向かい合った二つの土地になぜ「ふ」が付くのかをあわせて考える。『万葉集』の時代の「ふ」の音はフである。知里真志保によるとアイヌ語ではプツ（put）は河口を意味する。チェンバレンがアイヌ語で日本の地名を読み解いた説は、こじつけが多くあると言われているが、考古学では縄文時代の文化は本州にも北海道にもあったことがわかっているというから、日本文化の一部分にアイヌと共通することがあるのは不思議ではない。鬼怒川の河口に鮭がたくさん上ってくる、少し海上へ出れば海の魚も取れる、ほどよい丘陵性の山地もある、このあたりは理想郷だったのではないかと思わずにはいられない。

それがどういうものか立証するのは難しいが、営々と続いてきた土地の持つ文化の香り、土地柄というのが、柳田國男と岡田武松が布佐・布川で育った背後で大きな力になっていると考えたくなってくるのである。